

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：42708

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14102

研究課題名（和文）19世紀アメリカ高等教育における「ディシプリン」概念の変遷に関する思想史的研究

研究課題名（英文）"Discipline" in American Higher Education during the 19th Century

研究代表者

原 圭寛 (Hara, Yoshihiro)

昭和音楽大学短期大学部・その他部局等・専任講師

研究者番号：30779880

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学士課程のカリキュラム編成の際に「知識」と「能力」の関係がどのように問われてきたのかについて、1828年にイェール・カレッジが出版したカレッジ・カリキュラムについての報告書において1つのキーワードとなっている「ディシプリン」という概念に着目し、これが19世紀中葉以降の学士課程編成にどのような影響を与えたかを検討した。

同報告の「ディシプリン」概念は単にいわゆる形式陶冶肯定するものではなく、知識の蓄積すなわち実質陶冶が諸力の形成すなわち形式陶冶へとつながるとしている。そして19世紀アメリカの近代大学では、この概念を变容させつつも引き継いでいたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の日本の学士課程教育は、主にアメリカのカリキュラム等を参照したうえで、「学士力」のような汎用的技能の育成を目指すために様々な改革が行われている。しかしそこではアクティブ・ラーニング等の授業技法ばかりが目され、こうした方法によって汎用的技能が育成されるかのような議論が展開されている。

対して本研究では、後に世界をリードすることとなるアメリカの研究大学の学士課程においては、研究に基づく知識の獲得・応用がその前提となるという考え方を一貫して有しているという点を指摘した。この点は上述のような日本の議論の脆弱性を指摘するものとして、学術的・社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This study examined how the relationship between "knowledge" and "competency" has been discussed in the undergraduate curricula, focusing on the concept of "discipline," which is one of the key words in the report on the college curriculum published by Yale College in 1828, and examined how this concept influenced the organization of undergraduate programs during 19th century.

The report's concept of "discipline" is not simply an affirmation of formal education, but rather, the accumulation of knowledge, or substantive education, leads to the formation of various skills, or formal education. It was found that modern universities emerged in 19th century America inherited this concept with some accommodations.

研究分野：アメリカ高等教育カリキュラム史

キーワード：学士課程 カリキュラム 形式陶冶 実質陶冶 コンピテンシー 汎用的技能

1. 研究開始当初の背景

日本の大学学士課程におけるカリキュラム改革において、アメリカの4年制カレッジで行われているジェネラル・エデュケーション、初年次教育、科目ナンバリングやシラバスといった様々な方策を参照・移入する事例が多くある。しかしこうした移入例の多くは、現在行われているプログラムを表層的に取り入れることが多く、こうしたプログラムの編成・導入にあたっての背景や歴史的文脈についての検討があまり行われていないことが多い。

その原因として、日本語でアクセス可能なアメリカ高等教育カリキュラム史に関する研究が非常に少ないことが挙げられる。加えてアメリカにおいても、学士課程カリキュラムに関する歴史を論じる際は、30年以上前の文献(Rudolph, 1993)に依拠することが多い。これに対してBastedo (2016)は、Rudolph (1993)に代表されるような、必修/選択、安定/成長、保守/革新といった単純な2項対立的なアメリカ高等教育史の記述を批判している。そのうえで原(2018)は、従来対立していると考えられていた19世紀における「保守派」のイエールと「革新派」の近代大学(コーネル及びジョンズ・ホプキンス)のカリキュラム枠組みの共通性を指摘し、新たな歴史記述の在り方を示唆した。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ本研究では、カリキュラムの枠組みのみならずその背景理論、特にイエールにおけるカレッジ・カリキュラムについての報告書(「イエール報告」, 1828)における鍵概念である「精神の陶冶」(discipline of the mind / mental discipline)について、イエール報告後(19世紀中葉から20世紀初頭)の各大学・カレッジのカリキュラム編成に携わった学長がどのように言及しているかを検討する。これにより、「イエール報告」と近代大学における学士課程編成の思想的連関を描写することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は当初、アメリカにおいて現地資料調査を行い、未整理資料を含めて各大学の学長の論考を収集し、分析を行うことを検討していた。しかしCOVID-19の影響で各機関の図書館がクローズとなり、計画していた現地資料調査を断念した。その代わりに、既出版資料及びオンラインでの資料収集が可能であったハーバード(A・ローレンス・ローウェル学長)、ジョンズ・ホプキンス(ダニエル・C・ギルマン学長)、プリンストン(ウッドロー・ウィルソン学長)の3機関に絞り、学士課程編成に関する学長の言説についての分析を行った。

4. 研究成果

(1) ジョンズ・ホプキンス

ジョンズ・ホプキンスの初代学長であるダニエル・C・ギルマンはイエールの卒業生であり、イエール報告発表直後にイエールに在籍していたことに加え、イエール報告執筆者のひとりであるジェームズ・L・キングスリーの甥であった。このような点から、イエール報告に見られるような思想が色濃く反映されたカレッジ教育を受けたと考えられる。

原(2018)でも示した通り、ギルマンが編成した学士課程のカリキュラムは、イエール報告に示された諸条件を満たすものであったが、ボルチモアの中等教育機関に古典語に関する科目を委譲したために、イエール報告におけるカリキュラムの核であった古典語を必修としない形となっていた。

実際にギルマンが執筆した学長報告書を読むと、「思考表現の様式に関する注意深い哲学的勉学以上に、よき精神の陶冶 [discipline for the mind] を行えるものはない」といった言説が出てくるように、精神の陶冶という概念自体には賛同していることがわかる。しかしイエール報告がその意義を、専門職に限らず多様な職業に開く形で説明していたのに対し、ジョンズ・ホプキンスにおいてはその意義を、研究及び医師養成に限定して論じる形となった。この点において、「精神の陶冶」に対する考え方の変節がみられた。

この内容は、世界教育学会2019年大会(WERA Focal Meeting 2019, 学習院大学)及び第43回HMCオープンセミナー(東京大学・オンライン、2021)において口頭発表を行った。

(2) ハーバード及びプリンストン

上に示したジョンズ・ホプキンスのカリキュラムは、これが前提とするボルチモアの中等教育機関の特殊性からか、他機関への広がりは見られなかった。対して20世紀において広く普及したカリキュラムは、ハーバードのA・ローレンス・ローウェル学長が提唱した「集中と分配」(concentration and distribution)である。これは前任チャールズ・W・エリオットが提唱した完全自

由選択制への反動として登場したが、「集中と分配」という考え方自体はローウェル以前にプリンストンの学長だったウッドロウ・ウィルソンが既に提唱しており、ローウェルがこれを参照した可能性が先行研究において指摘されている（福留、2015; Geiger, 2015）。そのため本研究では、ウィルソンによる学士課程教育に関連する資料を収集し、ローウェルに関する既存の先行研究による分析と比較するとともに、ローウェルの学士課程編成の思想的源泉について分析を行った。

この分析の結果については、今後学会口頭発表および論文の形で公表予定である。

(3) 日本への示唆としての学校段階論の再検討

上記2点の検討において、各学長はアメリカにおける学士課程を、単線型学校系統におけるハイスクールと、ドイツ型の大学を移入した大学院 (graduate schools) との橋渡しとして位置づけ、その橋渡しの要件として「精神の陶冶」を位置づけていた。対して日本の学校系統は、単線型の高等学校の上に直接ドイツ型の大学教育 (学部専門教育) を置いており、その接続が制度的に担保されていない状況があり、これが高大接続をめぐる様々な問題の原因となっていることが考えられる。

この論考については、『湘南工科大学紀要』56号に論文の形で公表した。

文献

- Bastedo, Michael N. (2016) “Curriculum in Higher Education: The Organizational Dynamics of Academic Reform,” in *American Higher Education in the Twenty-First Century: Social, Political, and Economical Challenges*, 4th edition, edited by Michael N. Bastedo, Philip G. Altbach, Patricia J. Gumpert, 462-485, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- 福留東土 (2015) 「20 世紀前半におけるハーバード大学のカリキュラムの変遷：自由選択科目制から集中 配分方式へ」『大学経営政策研究』第 5 号、49-63.
- Geiger, Roger L. (2015) *The History of American Higher Education: Learning and Culture from the Founding to World War II*, Princeton: Princeton University Press [原圭寛、間篠剛留、五島敦子、小野里拓、藤井翔太、原田早春訳 (2023) 『アメリカ高等教育史：その創立から第二次世界大戦までの学術と文化』東京：東信堂].
- 原圭寛 (2018) 「1860-70 年代アメリカの研究大学における学士課程の編成：ジョンズ・ホプキンス大学及びコーネル大学におけるグループ・システムの導入とその背景」『日本の教育史学』第 61 集、32-44.
- Rudolph, Frederick (1993) *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study Since 1636*, San Francisco: Jossey-Bass
- Yale College and the Academical Faculty (1828) *Reports on the Course of Instruction in Yale College*, New Haven.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原圭寛	4. 巻 56
2. 論文標題 学校段階再考：教育制度と教育課程に関する比較教育史的試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 湘南工科大学紀要	6. 最初と最後の頁 73-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 原圭寛
2. 発表標題 19世紀後半のイェール・カレッジによるドイツ受容：ノア・ポーターの米独比較中等・高等教育制度論
3. 学会等名 教育史学会第65回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hara, Yoshihiro
2. 発表標題 "The Discipline of the Mind" and American Modern Universities: Daniel C. Gilman and the Curriculum of Johns Hopkins University
3. 学会等名 World Educational Research Association（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

水野 博太, 原 圭寛 (2021) 「古典教育をめぐる議論：19世紀の日米における事例から考える」第34回HMCオープンセミナー、招待有り。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------